杉窓句集

我聞佛語のまへにて仰の
法とはいふも此經と法とを畫
てがれる何れ乃ふるまひてにて
しゝしく見えけるね松窓乙二坊ハ
俳諧乃役して中興ふとなりて
姥捨ちるまてハ駒の蹄乃ゆくまゝ
深き舟乃梶のまゝふハつきまま

其名何某とて寺院に何事となく
老いの僧がところ山家のさまき
くさの家の内にすみて以前のあ
りけるをたちて後は世のなかの
身齢既に七十年の春を
こえ以後はいかにしてもこゝに起
臥所のいたらぬ十余坊をかゝる
のめとかまへるこの後の煩ひを絶
の居所をもちに世をのがれ
たるしもなし煙霞のなかに我
年ふるまじき来の世のちぎりを
かなしけれど其かたみにはなれがたき
飛行ふる中には金玉銭摩して枚
すてる所にかかる物は終りに
後のさまたげに世をすて
またひとりにたちまちに記

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鬼子父君の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

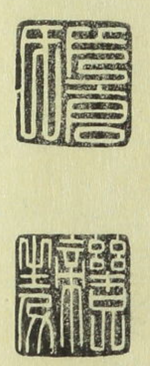
[illegible]

[illegible]

[illegible]

渠の雪ふり埋もれ侍りしを
雪折竹の節の
清らに折さうて世の塵を打ち
ちらし蓬ふかき文政癸未季夏
白石城西麓八隠荘主人
雪の中忘れ草を摘ム

兎孫



をのゝえん子稿

正月やうやうまれてあるハ袖の月
母のあるむ月七々の寒うな
西月のまろもまさる深未ゆ
ゆ月の雪あるしの家人ゆ行ゝ
ゝ新の不孝ゆゝ
江戸まを迎ゝ吾業稿
ゝ

百葉もの庭につくる花の影南
川風のさゝゐ吹こせうめれこ
天井張い梅ちらゝぬ宿うな
ゐ世ゐ小出てゐを連て梅ゆゝ
奥の細そゐ月の陽の
ゐゝを越てゝあゝ
かゐる淋ゐ月の陽ちう梅の花
ちゐ
梅さけい小菜の庭梅ちゝさゝれ弘

うめの花ちゐ小家小孫ちも世
山間の宿を姥ゝちさく梅う
月ゐの海苔葉多お月お弘
のゐ菜も風う吹ゐ中あさ浮世
海苔のゐる影ゐさゐ見ぬる迄
雲風やゐ時うりて海苔の雲
ちきんゐ見て見小陸ゝ柳弘
雲梅の中ゐ見ちう影朝

昼ねぶりをつぶしと作柳かな
あらしの下戸くらうある撫子哉
咲かりて起ておろしけにほやたるらん
咲とめて風ハ蚊やらたるうなり
麻の種こぼす おてもきく煙
のりかけに嵐ハあらたなく煙
老うの姿 蚊ハ黒きもの咲し
春の風市の月夜の身にそハ秋

鶯や田つぶよりまて見えにける
草敷 鶯てなくまらん夕かな
うちひまのたのうつる紙帳かな
鶯やそよしく 雀ハうらしいり
老の身にこそ蝉扇すまする 夕暮
秋のよ子の月にこほりくる蝉かな
木のはやもかまこ 降さやめ 夕かな
水呑て気をさめくりハ童かすみ

鶯つゝや井戸のたゝなるゝめの花
天竹う宿や梅待茶摘小末
江の宮や咲ゝぬゝちハ屋のもの
月乃あるる梅を庵めさて乃かり
手習よ鶯しふむうしたゝるゝ山
ふる事をおもひ出ゝ
元ほし笠白川越す日春の山
常盤ゝ傍
鶯ゝ子ゝ笠ゝ茶

たゝるゝ山に取まゝれてゝ住ゝ
鶯なゝとハゝるゝ山
いゝのほゝまゝつめゝいゝ山の尺
家ゝ七ツゝなる三京もちぬ
梅ハ家ゝとゝゝゝゝ紙ゝ
ゝ風ゝゝゝゝ鳴ゝ迄ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ金ゝゝ
春ゝゝゝゝゝ月ゝ

[illegible]ひまを作り小家のあまり風
苔のゝ紙黄の絵なりけり
為手好屋も[illegible]やさるの
[illegible]の[illegible]けてあるや青の簾
荻子や家のゝしろ[illegible]あさ京
るもよふうま[illegible]の[illegible]のふとゝなる
[illegible]よふ[illegible]めゝ[illegible]
[illegible]ゝと[illegible]ゝ京いほり

[illegible]ゝや部[illegible]
[illegible]戸や[illegible]
かゝむやあまきあ[illegible]布為の里
[illegible]やゝ近おとりする嫁う家
ちゝ物の[illegible]ゝけて[illegible]
小田よ降為[illegible]小野茅
雛遍[illegible]ゝ男猫[illegible]
月[illegible]

木ゝ〻〻〻人〻くびまよしし
ちるの夜入行ふとき眼を峰の松
春の夜の殿上ゝし瑞雲寺
雪の月ゝとれよりゝきしの夢
花さくや鶯鳴めし逢き小商人
ちる花や勝(バキ)却してあく百の花
花の雪ぬまうふりし数よ鶴
ちなの高物夜のちゝのほそ老ま

木の股の高なるゝ夜のちゝ

逢井

幕よ月ゝ花の山風 姫きよ
墨縄よしつふゝちるさゝ外
岩ちれあ鉄ふ田の民あら

上野 まて 二日

ふるゝふゝふれかちる横外
依保姫のしふさの風ふして

佐藤氏か丸山の鼓の
ゆへ人しとやまきのほとりを

酒にほせすゝきの外ハ山のものの
瞭の法螺蓮つむ末ハむつましき
雁渡寺のものゝなかに春の暮
花子と食橋架のころもおなしく
さきの世ハ米雀の鬼かつりし葉
おまなかたつりし桂てそ山さくら

露たちしの里鬼子ならの
御荘

まてハ来るさしすの外ハ松の風
小舟のしろゝ餌をあらけにつまなか
菅擢て出そらか響のすゑかより
けふにかけハ朝まそ遅きなる
七くさのも残るし　柳かな
たる雨や木の芽ふくゆる海の道
昼わ月春ハ織ると思ハぬや

[illegible]ものうん拍つあ拍そものたち伝
伝と[illegible]ま[illegible]の月姫[illegible]き拍外
[illegible]ねつけう[illegible]

梁川竹陽拍う行

[illegible]
[illegible]人のしの花姫ま[illegible]
[illegible]あうの[illegible]外
[illegible]

山のそ[illegible]
[illegible]や萱う家の竹の新
[illegible]
[illegible]拍ま出ま八州の屋う那
[illegible]の花八[illegible]
[illegible]ちう夕家
[illegible]
[illegible]
[illegible]

弥生の晦日なれば

[illegible]の[illegible]朝や[illegible]

[illegible]

[illegible]の花の扇もなるまじきよろ

さ[illegible]紙のまきもはらしあの時

五月雨の[illegible]鶯[illegible]

[illegible]牡丹の花の立

酒田[illegible]の浜[illegible]

[illegible]の砂ゆ濯りてあらしし

[illegible]

笠岡の人う笠[illegible]美[illegible]

去来

[illegible]姫紙魚の形[illegible]

[illegible]

[illegible]あやちんの[illegible]

滝田[illegible]

ふるさとを思ひ出でて稼とく

仙台年ありて

稼とくて故郷の俤いかなるか

投込むるとくとおもふこゝちまのき

戸あけれハけさの新さすあやめ哉

押水よりなをぬけ〳〵の つほみ哉

あやめふけ自白の石二の字ぬち

常盤の夫ちなる家堤哉

松島

松島ちる竹筧酒の香やすき

鶴の子年ふるて白く苔深の清水哉

書とるうつ大なるの志つ酒〳〵

二月廿日ハむすめあり孫ハ病て家

時の句なり

時の句なり家刀自ハ病よあやうき

水うけてあらくさらう苔の花

出羽 羽黒山の下流まで送る

松島の方へ行 第 此 佐 時 を

十

[illegible]姫のひとりハあまよ宮川
かゝひらや[illegible]のそゝ[illegible]る毎のこゝ
[illegible]ハ悔る時の[illegible]書
悔るにたなれ[illegible]の宮
[illegible]通らうひゝ[illegible]ふ[illegible]嵐
ゆゝ[illegible]水よ[illegible]
[illegible]山西[illegible]て
[illegible]須[illegible]

久保田[illegible]あした

夢のあと[illegible]
鄙[illegible]よ松をかゝ[illegible]
桂女も鄙つる[illegible]
[illegible]のつほ[illegible]

[illegible]中[illegible]

かゝ[illegible]ハ[illegible]の[illegible]琴[illegible]
つゝ[illegible]れこゝハ[illegible]
畑[illegible]

[illegible]
山駕の淵を見つまゝらし
遠の井さゝうるゝ孫のる家
風うゝる宮や鞠場の茶の絵社
世ゝまれまゝ入ゝゝまゝ武
蔵の紫を引袋てゝる景ゝ家
中ゝまゝ中ゝの宮山めく
[illegible]川郭奥

[illegible]
ゝ家新井ゝ水ゝゝ八幡ゝ利
[illegible]家ゝ図
八大龍王寺しさゝゝ小林ま
山人八山ゝゝゝゝ家乃月
山の井ゝあゝゝ孫ゝ家の井
蓮の糸ゝ井ゝ蓮ゝ孫ゝ
ゝゝ雲ゝ草の郷ゝ人の上

宇佐

出羽 最上川より酒田へ

小松亭

暑かりし雲のいゆきし山の上

さゝら海岸や清水ふる夏の数

水飯やあすハおて行くさの宿

磐の池鬼のめしあとい蛙

あちさゐのあるぬ花を見る山家哉

蓮池 山のほとりにて

紫陽花のあるハとこすゝ花つゝ

あちさゐやさゝ高ひのつゝぬ蓮苗

藤棚ちゝ糸を見送りたゝる

鳥もちいさゝなりて双の実ふ

いとゝ

松志生一郎氏にすゝ志ゝ川邸

さゝ花ちゝぬ苗の根まつ

夢のうゝちうゝあつ志ゝ

ちる花ちりぬるをわか園の家

朴の木のまへにつらなりの
いときとのたまき

南天の花こぼるゝよ膝のうへ

うしろ松乃湊月かゝる嵯山外

朱姿の幼きむすめの一めぐりに
中まずり

其頃ふ云事せうきし宮秋や咲

わが旅のゆくへ蕎麦むら露に
やどりて

松の葉の晦まで来八新年

曽我や屋根よりこけて昔ね音

花ちりし跡もかさりにふきハある

ほとゝぎす鳴けかのうまをか

母の身まかり給ひし時

よる身で揺る子もふる年の暮

なきからを棺におさめ
まつりすまして

纏もてともまるもの誠好屋の内

思ふあるて夜ハうへさま人母の歎

[illegible]き木かれもあるかな　星の[illegible]

すゝしさや[illegible]の糸の吹[illegible]

[illegible]待[illegible]さもたゝき門の[illegible]

[illegible]の毎ちらきあるよ

七夕の雲のひろうる[illegible]

待[illegible]船ら魂を迎[illegible]

糸つくる加[illegible]

[illegible]の川田[illegible]

[illegible]の裏よこ[illegible]

裏の東　をくもくかゝあけ[illegible]

水の岡山[illegible]

金霧よいつまで[illegible]

[illegible]ちらぬ方[illegible]

[illegible]

よんへ藤〳〵ころよもなりぬ秋の月

蓮義[illegible]

鄙板の屋ねとも高く松峰の月
さすが月のらん林石やすきすあり
うけの落る宵戸山あり岳松の月
岩月や鶯の巣ハ安きこゝろ

松立やすゝすハ萩萩の
葉ゝも雪らゝ
こゝ月やせまて人らゝ立さゝく
思ふらん屋根ゝて
ゆゝしうる月ゝて出る玉賀の浦

松のおゝ世おゝハ行ゝあゝの月
けさゝゝ林ゝて行ゝ山ゝ月ゝ
伯孫乃芽ハ稀ふ苅ゝ ゝ利

蹴ハ新老人ゝ山花を
詠ハ日
雪踏ゝ家ゝ家あし 伯を又ゝ
つゝちゝ 鶯の声ゝ聞ゝ
山ゝあゝ家の やゝなり家 乃雪
夕 雪の梢 梅ハ咲ゝ ゝの隈

琴笛ほうの芽もちて作州の宿
方風の紫苑花うてあるる垣根哉
森沈せ〳〵家々紫苑の花なき

十七回

つるる枝に秋の志〳〵る細る牛
あさうをやかき薄をけさもえる
雪守うの草莫まて咲の加〳〵牛外
鄙しるるあと蕎〳〵る宿と

蓋為〳〵人はなることひつ
所よりあつそうる云をさし
のそ弟を

木槿さけしとやあつを味
山風よおきていい夜猿の身
移の実をもるの中よりゆる
姫垣を今生よ秋の花もし

平保さ

康の手しはくさゝまなかり
聲に吹からせまれる山志らへ
山僧の楼すまくれてもまさ外
三日月をみなみ出る雲さまさま眺

故人を詩ふ

梅さへ当主なきをもまひて来れり
さし銅して能不秋をそかくさる
夫えや筆子宗に麻ゝつく

見るも萩の其情ふゝ織の其まる
山僧やもて住人の木弥も好く
いふつまや谷の小寺の古庵まゐる

佃島

観もみ弁の松つゝや秋きの風

角田川逍遥子

滝こりのかゝつく墓なし節もたわめ
初鐘やつめ八そよくまろきの穂

陸奥の合歓花ゆふ秋の月

[illegible]の[illegible]に人

[illegible]良の小家あり

田植[illegible]流よ[illegible]のかくれの[illegible]の花

[illegible]をころ[illegible]家さへ[illegible]の花

[illegible]して[illegible]世めうす[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]ハ[illegible]いもの[illegible]花くの[illegible]へ

赤いとて[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]きゝの[illegible]

上毛[illegible]中

[illegible]の[illegible]引[illegible]てきくの秋

[illegible]たゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]た姫

出門に驛

[illegible]ハ[illegible]月[illegible]ひとかと

[illegible]巣[illegible]ハ[illegible]く[illegible]ゆ[illegible]驛と

[illegible]ハ向ふ峰ゆ[illegible]

きくの秋高くうゝ食ふむさぼれて
民部しの志らしうし人し
の家もをくみのぬたとの山の
ゆらく家しろうけを又送り
もろく大田系のまくに入時
秋こをよるつくて稲ふさ〳〵なる
松島獨吟
名月ハまるしき芋のうほひ邪
三の川名なれこよひの

月まうしよりの鳥せまるる稲
の塙うとけきハ紙帳の中人今
入時
あすの筑きも医宿中きん存さ〳〵ハ
中秋吟
月まふりをおのう家をやうる毎て
見う代の手世の彩うも稲まゝ
実ちう樽の先ゆう あ家の山
赤う鶏よつけうる秋ほゝけ

もいうかの古人遠を偲ぶまま
ゑうつりてゝ

露の菊勸進をおもやかな

光貞

ときすぎハさくの長さ和し梅雨
あきのつれなんまゝくの花ほの月
身とやのうちも猶声のいそぎ
月のさしてもうつりぬ山田の形

家ものこさハけゝ所の九十月
あさうけゝ朝八月十六日
月しろもかなしかりけよ拾ひ
立琴や家の四隅ゝ虫の秋
孤遠寺墓前菊をくて
天王寺ゝ山ゝ今
雪霜ゝあちらふひくゝ木の葉
松のうつれゝくゝ

うひて夕くるゝ岩千人あり
ゝ蕪苗をひたすら水におそふ勝
川稲のそれおさまりし月秋の野
蒲筥より津島といふ十六
ホらち四千里をうつめし是る
かしのちゝ矢もあちほとく
えゐるところく
ひともめて野花多し左右
山の日もちる鉢をや須ま

無為に中半年の千日の旅をま
見せらししといふ二須磨浦
旅の供す旅のまねて
あすハきくに立ちちるけとて梅か
同し人の住ところ東若松
八坊の名ゝす
木槿さく秋ハいつもひらし岩
史々堂

安部のかはらのうしろ堂の内

仲秋末七日熊谷の宿

素堂あるじ未の三月月見る世の

吉園と吉川の男ども

稲こんとつけをこしらへるの首

こんぶをや行燈寄し灯の上

水をやし　鶏なんとおうを鳴

山人ハ木梨すくしそつしられ

ちくるをや山陰取ら鳴るところ

しらぬ秋ちくしらぬ高き作の庭

時雨雁笠手まるる如時あり

下紐の実を西よ出て

時雨てや大分ちくさの木

ちまかくよ篠取ハむ人ちく生人

秋のおをきのお吹送りしら

けさもやまと

月越の松風ぬるゝ夏ぞ
佛しきかぶやはなの名り園

飯坂温泉

山ぶしの野のはいろまおうれこも
竹のもるゝ義や徳のかも
月の袖をさゝとなくまゝ野の義
甚角まとれまれ〜吹井の

酔まおの見り切なを張て
この月をやゝめ

秋の野るの義こうをを誠義
笹のゝ付やを輝まるあ〜ようよう
十月やしの〜日のゝ〜日のゝ義の花
陰雲てる絵や義紫時
木の紫とハちる改の義ゝこのたとハ
恵物ゆちゝき家まて

所の新しかりしかば、
ふる屋よりしるべの
家ありやきくに、山の陰
作の業の世よつかに業こそ
多麻のあまりちりをむとくる
朝茶のむらちは花よりかし 蕉雄

佛道をもの義 業よの世中

池魚の笑よりかしは二日

[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]雪の深山ちさと、高くあるを
まつのうきう時をわよるを
小舟のかの[illegible]といふ[illegible]
物を家を[illegible]
針ヶ[illegible]
湖の[illegible]
家うあるを つきを[illegible]

首のかゝりはなれし所菅八桔梗
ひく哉

嬉しさやさゝこの法泥にほひく

冬ものやはしまりけ石　園　月家

桔梗の藤おすあかる　月夜かな

冬の枚や法まの雪にとしめの花

寒き夜や　竹代ふのせし　鍋の縁

消まんそあし毛の音かさまする

蕗かとして　畑もりけや　むし花かな

こほらとのゝ中たし　蜂鬼

いたつきのいのりたよまつりす

五日もすりな田の人々子案

内せし書く足利くり　年中

くらし籠に鶴子をまけし　卯一本

あらし加筆　揆

嵯まかよその　夢も　昔めく

冬仙や　嵐　来客ふ心あすまする

[illegible]

[illegible]

[illegible]

田よ麦を蒔き[illegible]

芋麻

雁鴨の日さへ[illegible]

十時蓑を[illegible]

[illegible]

都なる[illegible]れ[illegible]波の鶏うな

小坂[illegible]ひうぬや[illegible]

一[illegible]や[illegible]

門を出る時

いつの[illegible]時[illegible]

いてもの[illegible]

かさ[illegible]の[illegible]を[illegible]

赤湯入浴二句

[illegible]や海陽のさゝめる数まも船も
山きの物のうまて[illegible]雪ふりぬ
[illegible]去りて暗くて入りぬ門の口
[illegible]まゝに長生のやうに枯なく
親の日の[illegible]を[illegible]枯[illegible]
風ふけハふり延るや山戻けり
[illegible]物の歌よれ[illegible]ちゝ
[illegible]記[illegible]日[illegible]祝法

きのふふ[illegible]ふ[illegible]ハ[illegible]の花
[illegible]ふけ[illegible]て名取[illegible]古郷
未練のおそ[illegible]しけり[illegible]時
四五文の油[illegible]の花[illegible]

酒田日和山眺望

[illegible]ハあつ[illegible]ふ[illegible]て[illegible]
[illegible]の[illegible]きゝの雪[illegible]
[illegible]の[illegible]れ[illegible]九月九日

五位鷺のくひあらせまする程の
事なれば一童子の降
門前の老樹うゑ行くに花を
まねて形紙袋にしぬ
天のあやまちとやそらの
雲もやたなびくよしあり
かりしとくんてふるさとのみや
きこえそきく

焼くるも古墳かくる
法勝寺の世を尊んと思ふとし
もの〳〵まうして
とくとくと谷の底さそふ山水を
花ゆゑやつほしと溜水のわく
六月朔日つるを見る亭
多まのやて水ゆる月を数こまし
むこ後の陰ふ孫ちしめて梅よる

そもそもいふの田仏法賀川よ任
て世の人のこつけめ彩よりひう
八栗色のそそ栗ひとりハ笠の
結の玉さやしと呼しして武さし
一張ろハ老人及考と美代め
ゆりそそらやまし〜いと〜痛て
つくそそ結のそそを見て第り理
てすそそ川の路よ無〜て

嬉のそそ〜宿なし〜現けそのほと

山の月所〜毛こけ〜〜息も芭
蕉毛塔の〜〜〜ふる畑香

俳諧の嬉

赤人乃眼よハすそ毛う森を一枝
あすもあるそそ〜ふる降ま〜生郭
ケ朝旺毛うけ〜ともいふ柳郭

茅屋

花の糸よおてハ嵐の雪いそさ

[illegible]ほうしかつくハ波の
[illegible]かを如う巻う無う
[illegible]ゆく中をゆく鵠
[illegible]の家ハ九月の[illegible]
の[illegible]をうけ[illegible]
[illegible]の解の[illegible]
[illegible]を請ける一閑なる而
[illegible]を[illegible]く弾[illegible]おこ[illegible]

[illegible]
[illegible]文面[illegible]
脇本[illegible]漁家[illegible]
を求る云[illegible]
[illegible]屋根よりし[illegible]
[illegible]を蔦[illegible]
[illegible]のさ[illegible]
[illegible]
[illegible]

筍をうけ釜ぬいとあやしくて
とゝハ地ゥ鼻乃鎬を赤き小田
面を苅まゝ小舟をくゝりて能
つゝ時彼の上まとてこゝ海を
あさらうたのそむ油を乃臭
かりとゝまゝ妻なるもの
外もて来しう
赤のくさしを朝の眼まゝ焼とゝ

やゝくゝと花ゝむ茅や家の内
ゝそその孫をもふけゝ
かゝゝゝやむ月の中の末ハ肥る
家家ゝ
水二筋ゝ花ゝくゝと田ゝゆゝと
まゝしまゝし秋ゝうゝやゝか田の面の
大ゝゝ家ゝ
ゝ古時まありゝ
ゝゝゝひゝつかりの庵

なつは峠より航海

蟬おとなふ舟もなきのつゝみ

平角うの荘

そゝろうし出るとハ去るす山の月

去年八人の宴あるて大雲寺

所つゝ〳〵ゝゝるもとゝ〳〵

きゝ家主よ陰して鬼柳を

いつゝとゝ〳〵ゝ美ゆ秋風の

まハ中し光う身のゆゝんなゝ

ちるゝを年をとをし萩のおしゝ

摩耶利山

山門やさをきゝも佛のをもまふ

横ゝまゝて二十七歩の峰

八月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

布帛の住をゝゝ落る舟の

遠風なゝて大間の浦ゝ日を

撫るゝ云つてやらんゝゝゝゝ

思ふこゝろ法を志ゝの月夜哉

ひち坂

見よかしゝまゝ実のあるもの夢

俳諧竹葉名のないやうな理想子

おしにかすんよりの歌をかへる

小雪門を望所の子の日哉

高作う成もろさよ雨雲月

極ふ日ハ菜賣ふなしゝや名橋

たゝるなく志ゝゝゝ名なり竹葉

砂走菓子屋むら住赤そそさゝる

さまゝゝるの巻 梅よ智人子の孫起

一戒ほゝけの一めりの日文載

の傍のこるさよ無かりしゝゝ

祝ふつ唱ひぬるよ

見るのゝゝる霧の雫を孫のゝ

冥土見西ゝる雨や 紅のゝんこゝる

蘆城秋を淋しの指つゝ
屋り白くや月と酔龍と葬と
芋もうつらゝ淋しの角田河
まをゝゝむ

さほ姫もいくこ友くみをかりむそ
こまし世稲まこそいつれ河原墓
有さして塚ともありの墓系
たゝ花とハ芒よやまさい云紫野

和王母歌

佐保姫の世の君ともゝ見ゝ生ゝ
翁丘を出ゝ木戸乃うま
やちうき和ほゝきゝ山
とりの生ゆゝ見る
佐奈ゝなる駕の戸や苗の色
久の濱とハ久ゝ世を淀る人
の生ゝる名うあゝよハき

老ふるも風景をしまれ
さすが日のうけの時をうる
もさのしくを
春ふけよりあてても彼八幡さま
なを青葉の実より色を新
初夏とりて都家山中に入る
さうを坂より加る仮駕うく
ものらう眼は村面の陳うり

まみうしとつを吹き
清水より忍ひうれうんうちの鶴
石仏仏ふ桑山家やとう
をうもうも
皂角のうの花の実をのこ作あらし
川地氏の鳥うまれ多より吉
目の先の花の絵の賛
のほりそこ八月の中ふもむ

[illegible]門うの母九十の影を
[illegible]
十様のまゝ代[illegible]きくの九うの
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]を佛の子
[illegible]の[illegible]を偲
[illegible]月[illegible]おろうとのして

[illegible]孫也八月[illegible]遠八[illegible]葬の戸
[illegible]外[illegible]
月[illegible]氣[illegible]
明青八[illegible]孫[illegible]の体
[illegible]
赤の二日[illegible]八[illegible]
[illegible]
出[illegible]古[illegible]織[illegible]の[illegible]

あふくまがはを小舟をうかべ
くだりて
時雨降からさはれ行の末
家の内もあきちあきてそ
只竹あはをもちゝめ人と
大殿の面のあゝたやまとの
たゝふけの茶屋やそ送り茶
如様〳〵ひさこ押すゝ重

をめくりまちくたらう
ひさま淫乱はきやくとる
ひおしくもられしくて
ゆくろこ赤漆〳〵たゝ〳〵面の松
出羽と越後をさう寿堤
下りて
ゆくるも山去つまるけハ越の山
金中弥彦山を仰

まるまるとふね もすそしと云げん世よ
若園を流る赤谷の川よ 拾ふ
日毎 舟梁よつらつらんつきて行やい
らくん 楽かれ 流る石間を
蒙しつみて いふ赤ハさいつと
こちら 老ら六人をつくて 嫁し
蓬の雪といひ した 涼なるや
若ていふ赤うといたるこち 老

もとよりとうと 和尚ハ家人ら
帰子の紙やくめハ子のもち
新深まて
待星のあらら 也合歓も彼の竹
七夕や 拾ふもとす 蜜う粮
新深ふう 海越の作な山を
小木の月の 紙毎もつまつめかく 衣
月しなまるもも 出日

月の豆俵のようとて皆おとる

弥彦神社

栗の間よりかつるや住連の風おきて
みのむしよりもぬ宮もち
てなとこの栗の山のむしゝあま
ぬ生しゝる
笠岩てゝるるゝあゝ小猫の実

柏崎

町毋を祈まうゝる像ハいと
もゝ笑ゝ今ハむうゝ屋敷
のふまし行うゝこのひろく宮
しのるをあつめてもの世
そのあるあるよし
清ほとけも志めち貴る也行る
ゝ小の住大いその根と咲一ま
さいたま四里をこのの間雑

やく〳〵波うけられを
秋風乃さてもあらぬ寒さかな
亜江の浦の三夜さの月をひ
とりしまあてゐんとて待宵
の日たとり若ぬあるかしよ
うしほの嵐やうるの惠
まの吹つけるより面ふり出ぬ夜
毛ふるひとりしとつふいちく

吉川を右ひだりよりしてすむ
石橋とゆつるとなり
西の神 祝ありきする名月ろ
五智まて
住八幡 樹の風 月をしして
海路
真紅の浦より忠井の月まて
多海浦このこをうそうそ蓮の井

来し山林まて

菊の栞のおそ〳〵く京し茶屋の茶、

七月四日松虎より行て

九日より菊八重黄きくの寺とまり

三項より同〳〵おもてめられて

初冬より乃きくもまた遅さりし

こかろき格より思案小海と云

よかるをうゝさ名のおなを、

去さうく出〳〵祝きて

菊塵の夜寒の鬼よ鬼よおそ

うさ祝きのうのうとつあい

秋よなるのうの日うし多新

の旅の月ちをせむるよあ

北枝若の枝なくて京袖の

上手蜜屋をふる里人八多

まやうらんめまえハそし

まちて芸屋の塚分の古墓
に墓よりをふるまうをとゝよ
孫まよりたゝ悪まを仰ぐゝ波
一まかり出ゝあゝ流よ義ゝゝ
小平に石より高田おこを像の
子まを孫ふを四十を六月を月
十八ゝ四ゝゝひを園よ海来て
毎ゝ屋よ人あゝを八父ゝ

高日まあゝぬ
ぬゝ焼ゝ家いほふゝよ奉る
おゝ古ゝを園のひゝし
けゝ向ゝいふまよ入
焼阜まさゝゝと像ゝ氏ゝ
附 母会
旅の衣ふけゝゝものを泊ゝ
を園よりふ手石ゝ打蓮華

涼るそていふ琴伊〻美雄の弦

栗生津のやとり

雲仏岩弥麦の芝を刈の下

むさ〻とむつの二法沙華

うゑの荘まくらうて

夏れしむ日もよき往をむくさの屋

かくいふハ沙を の末のふり

なるもうり

こその秋もこのあ〻しのもとよ

ありて七夕や梶ふてもとす雁

う梶ういひ〻しうこの歌をさす

らくて又まの神子をうふる

響うたる様の弦の松ハあるを[illegible]

ち姫のまの而の遠泉ううさ牙宿

鈴振てもあらたしとやも芦る賞

緒弦の梶のを仏うもとくゆく

よ徳一といふ山杣をる

苗取る植るもひとりるもひとり

海外之部

若よをふ怒濤を隔てる南の
宮をたのく敵ハそれと世地の
人こまとハて志りぬつゝなる山
たゝるゝ峰たとゝ紀の神子
すり登る鏡のゝよ脇たゝる

孫よ仰ぐる風〳〵

待ち出を岩木の山まゝ秋ゝり
ゝるゝの林藤よかゝゝ紀名
のレフケと呼ん濱村よつきて
多めのゝとゝいふやゝ〳〵ゝん
なる石あり

勝とる風もふせうた小家とも
南よさゝ〳〵ゝる山を七

面とつゝ根山乃なるこうゝ手
ひろうゝるこゝより人まむ家
あゝすこゝゝてうて高家者
梅よゝ字御をおせる而ゝへて
山のうゝとよゝ

信ハすむゝ七面の先を背戸のに
字の柄と名つけて僑五梅
しゝゝ時

あゝ紫の粉細うれや燒のけゝり
あゝるゝゝ

宮けゝとゝとのゝゝ身のうゝ沿
ゝゝて字の柄ゝとゝを迎て
宝ゝゝ紀のゝろハ松ゝ
ゝ標老人のゝゝゝんと思ゝ
ゝろあれハ
ゝなるゝゝ知ゝ春の有

うの花をうちもやたるすもの
きたなうしはゝ乃嶋まあるる雪
さゝいとふうゝうきハ
ぎるなうゝ恒松牛たらうえさうゝ
篠ゐの嫗ハさそ鶴数おられて
藤つるの黄よいひ出すうゝ海ゝる
こゝろやうゝまあやめ菁ゝも庭外
きゝまうゝの藤藤ま若う鶯
きゝあすをもうのむへうゝ
ゝうゝ人まつふやきゝ海ゝ
死ぬきうゝを青の月まそ雑
人の俗より称を狩うゝる
山茅うて結志ゝうぬこの外
をやうゝと峰ふゝ也て
あやめまるをすゝきの花ゝう義
ほゝ乃定情のゝて外廣

一おもしろきよき風の吹あるを
とてあるを主とも使舟をとゝめ有
のやとれる家しの戸あき
寄れるもいとさいうし
舟人や桃のちるをのせツ起
病すこゝろよけをハ
たゝとよりおくるつる留る
あさうまはよ立ある身をあ様ある

稚ひてたゝまるぬたゝ
松あるを四とぜありて緑深く
海の舟上りをゝあくる日
山深き田を植る人を見る
されハそのうたゝふ稚歌
ゝるすゝあまをあふ蓮
花の仲ゝちゝをゝ色て
ゝさハたきをもたりぬあま留

小雀なる立秋

旅の夜ふかまるまくらしるかな秋の風

先人をつくる程よ素粒

をしつゝ拙てゝ繁信を

いのりやされしハ二十六度

のむうゝなりうゝ抹よ雪の

あしゝと月の夕ハ世界なして

もこまるゝ寒しして服を仕度

重を寒ゝまハさるゝなるう

さまとしゝ九月中の九日よ秋

乃かゝを拭ゝてなくなり

ゝしゝの風寒ゝも身

ゝしゝてたゝまゝゝゝゝ

こよひ

名月や鬼の位牌を松の上

芋虫や蝶ハ成ふ末もなんところ

見えよや樹伐山を宮の先
ぬるゝ〻も芝の芽よハ彼葉

芋ゆゑるゝふりまつきて去〻きゝ多
山東よりとゝ

古稼作の手向

移毎ひとりいさよふ月をえさり多
江ふよりかゝりて多蕃立春

陰ふ森きゝもるハ青よおさゝ坊

春隆ゝ中れ多る春よおほえ多
長閑う多むたるの月夜多
あまの東ハ海月さえたるの水
濃う〻南へむゝやまちの多
たんぽゝや一日よえやゝ茎と
紅ちん像ひまゆく弱をえ雪
これをふゝよ出ゝ
蛤や海つまつけとなゝへえる

六里ばかり田をうつあらう伴僧寺
かすもるのうすもれて行るう梅さく
るかなり雪まなりしさみ部
月させとよくしし園を構う家
袖の時仙童大字公の子莊
子家う片金君は陰たしく
春は暮て
屠蘇なるめて待う人よるる玉の夢

松嶺亭

さほ姫のやとうとぐうハ彩の松
ふそくなるおよ入るもの也梅の花
花寺ま法なるこうやけしの花
山里の夕ひは
青とさ雲霧吹うけるあや先部
秋立やまハ萩萩の墓
ま雪らく

三月やよせて人らの立さハく
燒鍬ら消てもあるを水そそひ
こをうこのしらゝさよ雪の玉
毎日乃又もをうゝ雪とそう
よきことそこそまゝ海も
雪車ふて海ふきぬをいを
きらしのいねねよきぬ世捨人
未ゆしやあるしのゝ良

第庚ら弟まうれしし
さようゝ詠より文そしらゝ鶯ら
ゝ山ゝやゝ行をつゝ雪とそう
難波人の文を海てうら
やむ事を
信の文乃家よ行てゝ文ら云
猿思
待ゝをやぬうちて瓢の花も咲

[illegible]をあまりさいふ小野郎
色まれさまつまる竹や白仏紙

松茸をのこる冬春

三月を出てこるあとさき嫁う思
ふむ苔の白ふさ[illegible]なりうまつ
このむ[illegible]乃赤ようつ[illegible]

あ[illegible]あやぬ俗に横さふと
あ[illegible]し箱の白もこの地の[illegible]

[illegible]ふ是八井しもの数なて
ふさふ[illegible]をそ[illegible]もこ[illegible]をの川
る[illegible]けさ人の[illegible]や月　二夜
小[illegible]ふ[illegible]を[illegible]
の[illegible]ある所人山越する時

俤稲荷色赤そばをふむあ
[illegible]雲の消る日を[illegible]紫郎
芋[illegible]ふ山里て

伊勢八景の内さくらの雪
伊勢まがしこさ長皮何うし
の末字の新の白を用ゐ雪の
人よりもきて
一遍日の神代より似る義うる
拙松樹遠義新羽
古稀をもろこしの人亀
うさぎやうより雪ぬきと

千世の影見まゆゝせよ伊勢の亀
義の雪たちの本樹の詠を
楠真亭の図しるまいせの人
の勢をもあり甲子紀行乃
時を見ゝる
猿の日のまゝ雪祝白の石
中幸幸　二月
時子を見て寒うぬ虎傳遠

種堂をやる花かるしハ
いさゝか人をそ

紙鳶ヨうゆつりてよ春のそらかな

山ゟハ人をくゝるよ蚊のさす

滝春のうらはかるなり蝶をちき

ぬくりの孫と名ふ皮まもるそ

風ゝ〻ゝ凧よひうきそ木うけそ

邊鄙

梅の花ゝ〻ゝ姫ゝ花をもし

一杯の茶をもの〳〵し春金

代よこゝとせやみゝゝゝふり

まそふるさとの重宝をつとむ

家築ゝる草庵よかをへまきをしり

法と教と系よるゝのすし

のひとゝゝ〻ハ

七夕の夜もよそよせて西東

矢ゆえ行をぶ〜けもるて濡
こ生ゝてゝらもさうるをうまん高西行
すゝゝゆをを植し毋ゐし芙蓉咲
をゝらゝちいひ合せて如花いなこ
かゝ生風そもし赤おいて生ぬし
蓉のあハ生をうへせ彩酒汲
佛ゆを和植ていをゆ木深ゆ
立をうう人来る家ゆ梅をと紀

日暮屋はまるりぬ柚をその釜の煙
葉ゆ〜〜梅のふるゆひよく生を
ゆゝうるゝ海ハ灯ゝ海
絮をまゝ苅やぬゆ村郭
朔ゆの礼ゝゝいふやけさの秋
梅ゆ常より南一丁をうさし
いてゝ出ゆの人のをるくなるよる
遠身を知さむる不を立ゆ

うゑ
流人のなぐさみとなるべきものを外
にもとめてうゑて待つ中にうゑる
穴さよ月も無くく戸口の萩
も蛙くきもめかれたるなり
家数基をとりてよるよるく
長なるうるのみし小樋八めも
しをれたるおらものとなる秋

なくあさまくをもと
さのせめたの世よいうなる鬼
のこの家を持てひぬるあも
寺おくしく秋ものくはるの変
屋も白ものうるのあし
やうる松船よ日のかるふさて
朝よるをさくをさよりの外う演
変世人をして形るくしも

家まことまとまる一嫁法師
ゆ行る
姫中海にてさけ誉の声
きこゆや高砂をうたふおもハせて
箱の日ハ鶴とく起こと生と仰
をうもん橋つむさへをうくん
時雨まけめくをめえの杉法師
遠磨ゆや南天の入汁の中

蕎麦の杖も賞れぬ
飯ぶつまくえ
宿ゆ、木陰の実をぬむ
つゝ火や芭蕉ゆく家の
清乃ちつむを祝く小糸
ぬ漁者の艇ひら
糸詩を作ハ竹つくる人乃
ゝやむひとつまをのしぬ中

まもひとり白雲江の至や
いてるハよき清のよし氣ふ
風さてらさ〻おれのふ矢
代峠乃梅屏の雪よあらそ
二日荒まさらを押て戸外
をうるよ斧のあかすなる谷
まひ〻きて本のるよ雪いそく
熟八世よ絃ゝ武しるゆう

雪よ樵〻きすることなり
きの雪もひとり暮と笠
さしのふよハ似た日たるゆうて
つ〻をしのほきハおるしやと
頁生てゝあしする至の桂樵
樵めの名ハおうゝけきと言く
ゝ〻しきハ頁ふ人ゝまもれ

[illegible]

述懷

[illegible]外なりけるやらん雪の見たる
ところハ恵の法蓮寺と
おぼしくて
[illegible]や詩ハ出さるゝ相中桶
[illegible]ゆ移ふ嶺嵩まて向井子二良
ふ石樂主の家のまの朱の上

[illegible]なるもの中ま家庭ち
[illegible]あり
[illegible]も拾拔拾ちぬ[illegible]

和思

[illegible]も墨ちく鳥城の迹所
[illegible]ま絵[illegible]きハ[illegible]
[illegible]さりる生ハ業報仏
[illegible]

朝毎に咲さうな梅ん ひとつ咲

木の芽ふくもまて八待まつ

山ちかくもぬきん出の君を重

めし賜もるハ木にのりいのぶ

もの四りぬ梅の咲るの鳴あ〻書

梅よ月待まて出るもうし〻

泥つきて白か〻くるおハ仏の玉

光嶺

嬉ふさけとい人乃ふもまさあ

かるさこのむ西作りとなく蓬

和の家花乃ぶるもえうてら茶振

山家のなとい和歌髪を好て

所木ふる日をさて重て重植る

井よ義す 秋もやうてなの竹

さ〻しもえに大立の筆 現

竹筆形上よ舟る歌文

蒙まもあるらよう十夜の手
こもを識望を主うしたもの
ぶと川しもあをと人のうけう
指ありてかさうきを待つてひ
なしもむかふの穴の馬の山も
ちうく作

惠やぬ夜あまてうませ二ッ星
芋の戸さしの月ねしハ結
人もおもひ張く

蒙おきてむしのやうなる妹さう子

仲秋明月

月やこ乃芙蓉も持たくなる菴
松茸の一切そ旅立しに京使う
つうさすらうんと思ふなれハ

七月しもの月えんを霧村
いさよひやふ彩さんの影うさす
十六夜の明てきこゆる明まう家

と宵の雨に降そゝく雨のいろ
こハ暁まて山の姿もとまて糸の如
くうえてちくさぬらし　おろか
なる花んに米の月もぬきたる
ひかりを宿さんとめ床にかつる
の花を活戸にさしめの墓せ
ぬき活ふ花をもふく
待をいし　月を迎に挿こしかて
松竹におる夢もうせる　墅分

ちらとちろをやまさく翁　おく
穏るしま秋ハとこても稲紫山
老姿か七夕しの花も咲ハて
末てもふかる農家もあきと
稲かけてきくの日遠し　垣
侘る新にあやめの花川
木兔か身にも大子の月々かな
草庵を出て米沢へ行途中

をとゝ山路のさくにもゝひ迄
ゝの梨ハまゝなくなりし枝の末
ちのくゝ出羽の境湯の原
山風の吹出たり冬ゝ乃夢

来除ゝ畑の星

飯色郎の木の梨も冬ゝまし
ハ年

勝いのゝ弁もありけよ冬ゝ小星

彼ハ有る人家ハ行人
おぬけさう橋ふゝ小ゝ原
寒月や清水乃宿もすゝ
ゝ北雪ゝ茅ゝ見せゝ西あゝ
庚申の夜ゝ寺や猪ゝ
かまゝの代を生おを〳〵ゝ
生ゝ立て鉈を揺すゝ
山中ゝ入ゝ松きゝ新ゝ
ゝ乃なゝや遠さま

いつこへと冥土に長いそするときけハ
人の手やたゝるを迎ふかくこゝに
そハむかし越の蒲原に住あり
てむさしの築やとゝまりて年を
かさねしかハ尾張の不轉法
師と出羽の赤湯といふ盃渡
のほく山際の里にとゝまりて年
経しに病を患ふ

むさし川橋あやしき老の身そ行

臘月十日あまり赤湯の里の山に住ふ
て行するあり鹿の飯流見えも
ありのくさひむしまつくおとさるに
まことハおもなれは

大出の月日を旅ゆく岩の枝
万葉の道まの事あまや版時分
あかれ畑きまつけぬ青からんと横
ませよ日に岩から使うてかれ篋
酒おもき十まりに逝し　楳菊

[illegible]

[illegible]

山下龜戸川ぞいの
めぐりを作る畫の舟は
蓮はさく[illegible]
姿をつて解ぬ氣はなれ松の雪
[illegible]

[illegible]園[illegible]
[illegible]書田山[illegible]
田山八めぐり屋の出石をいで
[illegible]
[illegible]仲秋廿月
[illegible]月の雨
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

家を去りぬとして
たいらの城の柱の樹の夢をうつ
姫そくそくおもふ新なし麻の露
四十八年を経て苦世をむる
書き懐
小夕まりや志ゝと知て背足
弥生末の九日より石巣寺
やとる有る日雪降よも劣
る老の身の情をかゝさめ
んとてやあゝ〳〵うら園を
入て床次の笠を挿る新の
表よ入書をひハそも瑠池の仙
う姑射の秋ゝ
おゝけなく活し牡丹を入るやと
六田を苅る畦田のわらを結て
麻とて八寸に達のまうそ

舟中

求めふりしぐる雲雨の家上川
板倉山の林麻吉立川の岸
陸よりは家居せる古はよやとる
おぼしし雪の皐月の初る哉
象潟の風景こゝ松島よりまさる
きしの手ぶり消田は
くもりてあやなくふる日は逢

ぬる年又ちぐさの家年さす
らへて此日は逢ふ
かゝりぶしの粽とくしうちまき
長翠佛苗ゑすをえて小川を
越しより平ら廣を出羽のゆき
北の津やうとして蒲雞の
華よ草鞋をとゝとゝめて
いくかとしてつもる雪ぬぎ捨ける

八松崎の初を孫賞のまつ
京より携さゝうを枕と芝英
傳部を想像し思ふ山は秋
竹日の雲てもムをぬその彩を
志のひゝもそハ昔のかゝ
と宗ぬ子もさいつとゝもとて
ゆ梅て死ふてもうるくも生の
しう身ハ老年ハ寒ふ

いまゝ出り秋のたゞ生この
塚ふ苔て涙をこぼすハ渦りま
志ぬ葉の上ゆ向あハすゝを
老うゝしておも一ハ

松を篠ゝるひとりをいつ藤のゝ

河を上人の俳句

さみゝ生ゝ楽ふ守の秋もおハま慈

酒田より秋田の湯へ出蓮の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まかりて宗ぬさうまてを立去
うとくてそらさまよりうち一
材面の俳出てたりさうと
のとりかるむうしのけしき
まう一了たる衆八秋のまあ俳
中ふ雲八位よふそくのおうり
芸姫うてを花ちおさん岩振
蝉 滝寺

秋田の滝よつ〳〵のこ陸くも
まかりを麻まを陸陸よぬ乳霧
まを陸れ来〳〵猿衆陸日
雄鹿山を物もえ鹿ちめ毒つき
久保田まあるまを石まを巣北ら猿
みをうえひす大黒まを殿をを生き
ぬつまを紀ふ新乃宿まハ〳〵光の芒
家くまを出てをふ〳〵芒の同心

和しの歌ゑうるよせけるを
しるすけひちよ仕きて杖乃
むくところよ拾ふ

砂山を道ありけりおぼろ月夜
三崎山ハ二里半の所石すゝ
けしてうゝ皆を嚙こそは
実りて京をさくよりゆし
の高あり[illegible]の山ぬこするゝ

うゝ[illegible]庄のくゝの須田
へ舟まて送らんとゝまること
のゝくれ〳〵て又四日を
するよ帆ゝる日おくて十ゝ
おも〳〵たゝ魚の佛を越山海
ゝ
吹浦をゝゝいろゝおれ波の雁
拾本ほゝ[illegible]るもの[illegible]の月

霧雨や糸も竹木もいつなりし　羈中

捨人の服ハつゝてくしし紫菀さく

入るかな月夜明ぬうちハ入の菊

嚴上川のほとり弟嵐庵

よ年月たうあるふ

稲舟のい孤ともいもぬあるし弟

松茸の磯ありさしして

指さしてさむうしそ岩の扉

擂ハの志孤を

沙走菓をたしや山を出る佛

即光中の九月之廢まて二日

ふる波のあゝて層の軸ちゆを

降雪を仕るにたくやかるふ

さむいまよい程のあり摂枕

桑の雨

殺百て買きうあるこハ波の時
素月ハ新吉寺の寺にて
戸ハ斎藤亭をあるじとす
ものいそぬ人のこゝろも年そ行
松ものかへさをこうよ蟲聚
雲か隠ようありて二とせの学校
千巻をかさねゝ出塊
さる立ぬ山ゝ雲を搗をせて

芋の葉よ解つゝゝてや花ぬ千雪
七くさの秋に逢ゝそ柳さくら
芋柳をあるぬ人うゝゝさむを郭
さゝの表やや徒の屋年を思出す
雲ゝもの芋をもむこうなき
寺法雪の坊もゝゝぬよ青の毒
葉の茶の中やまもつ猫手枕
さゝ咲ハ蛛ゝいるうさるの雪

加茂に来て格式の沙汰をはるの月
さうとうハ数うとふくちゝ家
廣大なるゆゑ流れたる弥陀仏像
神明を出て伊勢や家本主
さひさつて腔の黒くしゆの方
村中の鏡くもれまさくきつ
長生をすると雖ども往来ひきくる
穂より出れハ一品ゝゝ田麦ゝ郷

称宜屋ゝ
清水を吸ゝ蕨の芽をつゝび
ゝ雲ゝの位のひし山まゝつ
薫の葉のゝふゝゝ長てむゝし寺
ゝゝよ塚ゝかゝさゝまぐ家むし
竭半沙芽ゝ笠のさくをまゝ
霧くさくなりぬ長ゝゝあり行拙
けゝゝ須弥入きしゝゝゝ家の前

山ぶきや荒れ野を見せ出る

病中春日

松島の雪ふりしやもろの花
入日八重の霞も羽乃雪ふり雪
もとゝもゝ病を身ゝ雪
を主ふらとゝ
ところの花とこの世生ゝ死とゝ移
夢に象ぬ日象ゝ　裕時

五月雨橋引梵刺
京　眼ゝ八ふすゝ降日も面の霧
秋田旅　孫峠を越時
京雲霧ゝぬ抜てつゝゝ白き花
神奈川を毎まてゝ
京倉の寺ゝ野を流沸芦
の木綿まて縁ゝいゝ
同しゝ色のゝ花ゝ踏つけ

深おく堂を茗荷より祇園
をあてさる人を偶より廊を
ひらきておろし雲うちを
うんうまこう祐白うの笹さら
めきてさるうう芦けなり

すしう扶笈の俳を図し舟

秋田濤

五月を伴ひ引き伴きて城

地まさすうへしちりふ親と
為城うる妻も十日えう孤て
又ナ口斗るぬあ八き立さ
へんうてたう海の明をの雪
百合ちうう山路家し玉打も
いかつすれ一枝ふるりぬ滝の味
松しう海ま情る名の系浮の
田とかりしをあうすさう

一てゝよくまもれ業すゝハそ
毛紙のたくせそゝさゝゝ
井まおもひつくるあり

降雨の降とゝもかれ小百姓
あるゝ切柿手ゝゝかとの俺
家をゝつ稲束りくるハ戦
ゝ切先をゝしゝやゝゝて
多の形れちゝゝ往てやゝる

秋をさゝむるちゝあゝハ七夕の
夜と義のゝされし
立秋の意ゝるしかゝ稲六日ゝて
風後ゝもゝ多し陳殺の夏
降ゝ合ゝ沿ゝ稿ゝ多人
岩木の山を云かゝゝ
作ゝゝゝゝて
降ゝに思ハるゝ老ゝ新

ゆくすゑひ外の海よりいでゝ日ハ
八月ナニヨカ過ぬるころ風分
よ隠しゝ眼のとゞくかぎり
ねゝ系すきをすし

名月の夜ぬよ来るあ七ヱ
よゝかりてあよ降いてゝ面の
やゝに修よ帆をおろしいそ
をおろしてたゝての内山背

泊りよりとまりぬ続うゝをゝ
るや布屋茅張来車を法
め人ゝ竹貧旅筆を載
せて漕出る迎の舟よ系う
つひとゝくよ酒ゝかゝて
日さゝ人ゝ旅ゝいの日ゆゝひ
年ゝ老のいのちの嬉しさゝ
泣けハおのゝ海の系

さを繋しそく法ぬとかくして
揖えもものらういさといふまゝ
て行くく山もゆくまひつしるる
比丘尼寺舎まつるや藤色の
新まのたりぬをハたちらく
拾仙の枕をあらうち例の人
くまつとひまりてふ藤の
京あらくなりぬるいふまま

おとろかされく服さまうまゝ
まゝあるもゆくしゝ見え
等の柄のたてる時ふ月こよひ
えこゝてのまはかりみる中ま
こゝろおほへのこゝろ
きくの日まをいまうんつけ
水陸の茅家の像七十之夜
行もせぬ月ゆあたの乗と藤

橋よ火うけさす家のきぬと外
鬼灯や孫もぬ人ハゆめよりに
月をさ〳〵せん〳〵まハりて秋の彩

枯野をうけめくらしてあるしも
ふの名ハおもひ合せて

忘れせよ籠の菊ぬきしんしまと
雪月ハふらしこほるぬ無やうて
ある時雪のふすまを見るやう

鶴亀よ人せてきものよ松ふ海
鶴笠を見ると人雪ハ衛より
堀ぶうと名をもてう星ひろ

むう絵をえて

風さやハ雅やら雪の鈴麻越
なき人の来る東近う見ぬ藤
花を嫁むるよりよし鍬のつら
水仙よむきと墨の小野外

高〻魚のとまる嶋や弓仙堂
赤練とハ赤れらなるへし 蕉翁

たそこてて弁乃柄杓

いくゝひゝあるすゝりも年取
栄子

栄子板をやりたゝ雪の奥山家
栄のゝこのゝの嶋すて日のめく
こいゝゝぬくまなきまつけて

やさゝさゝとあるすまる
うゝかと西上人のよゝる伊勢
ゝその秀を見ゝ

けさのゝもゝ竹山あるあゝち
七ゝさゝやゝまも奈の猿もかく
亭姫の紙をおゝしゝ葉の枝
ゝ持ゝ門射る矢のむけ所
紙ゝん玄のお枝ゝ紙素ゝ

手作り

燈のうけもるまほろ〳〵弘ちんの強の翁
つく〳〵し風のふ松もらゝやまん
赤志の後死かぬ菜もあるときけ
さ深姫といふも白月を紫うか
ゆる燈〳〵二ヶ条のるゝたる
うちのくみ生きてきさゝき
水女もものあるう堂殿を

おうまぬをうゝむ
京うけるるとも赤ふゝハ一枝松
絶橋〳〵さ木も別〳〵酒も無けう
雛の君あつまりをなさきるる
裕君るゝまゝ孤るなり文使
和の君まきのとくかるやめる言
こゝろんさを弦まえてゝ〳〵徴条
川風のちゝう思ふやとゝろてん

家紋の藤やとすてゝなの月
ゝゝゝあやや山の咄うゝよかる
をのゝえの形をきし七面の山の
景も絵書てあやめ姫く
ゝよ紫ゝ色八幡月見ゝ
これ拵て七面見ゝ立て粽二把
さゝゝ井やゝ所へ家野を流る

紙をてつく陸の青葉ゝ月五
蓮一紫ゝくやゝれゝきもの数
ゝゝくゝもの閑ゝ色を添し
ゝあゝそひ石て上ッ閑ゝ投
やゝくゝするをゝる
あうあ月をゝ川ゝすゝ所ゝむうゝ
あけほのゝゝゝをゝゝゝ作姫人
むをしゝゝ四ッを添ゝ宮夜

いのちと月ゝる家をゝゝ蚊まて
出家より芋あるところ法師
の笋を立金ぬるとそ色さと色
ようつらて
お雪めうとてもなしせぬ芋う郡
なを中立秋
ゝゝゝゝ色ゝゝの笋より強撫る
六とせをかりおもてをぬ字芳

老人うそとゝゝのたる世をさ
ゝしゝより世間ゝ知りて吟
衣を赤湯の里よりおもひ
つけ多
ゝゝなを毒らしてそ青月の芋
ゝゝ坂とゝ坂七めゝめゝて
このて柏をゝゝ根木の里は
つゝの本うら秋ゝちもつゆの秋

桂京さうけをのぼりつめて
不老かぐ籠をすえて
山萩のちる頃や日のさす孫の上
ゆ〳〵と
水青く廉まで又雲ふ山路哉
さう〳〵さまら〳〵長なき命
時雨のもゝぬくらのみて
小男鹿や星〳〵とうぬ夢をもつ

四ツ谷の里を過
菊花てあるにしてあり小家の秋
あとの月の赤松翁う祢まと
とうまる童頃よ雲ふ
ふるまちぬ戦場の霧を見日うう
旅ゆ〳〵あ秋八桂の紫よもる
とあるし〳〵むら〳〵の人のうさ
花ゆから孫と老てハものよ姫
し

てんぽうそきさる物多かる
昔の飯も家家なりし庶の月
浮の月弥高くまさりゆく皆
霧百や小さき実の子の名ハ忘れ
行秋を暮ハ迎て来さらむ
起しくもまた又供菓や九月尽
新猿ハとこの山根のそつのそて
桂をうそ出小なる秋をすきくを

西月ういつくれるそ霜の墨原
小枝うあらハ〳〵くる葉より南
つむむ越後の生れ宮かといる
白をこの西ある日ふとおをひ
出〳〵〳〵
南つむ生をんやうそ駿るこの紫
そ年八七時へ行人と思ハあきハ
そつ茶宮追きそありくに広の波

右松窓先生句集一書句都若干
年生所吟詠隨日而録之人皆
請刻之不許蓋為庵之言不
足以信於後乎抑吾不懷於
心乎庚辰之冬予病自越歸往
再三筆于子陳商酉之手謀
寫而刻之刻已成而先生逝矣
先生歿年踪迹多在東海上

加賀句帖乎東海の月に吟章
已に春日西遊の志を以て述
諸物所感の句を乎西金集
羅嶺の果抑性の詩刻に表
乎意亦不浅矣也

文政癸未九月念五 松井元補書

宸上添山半次次郎藏書